

登録日時	2009 6/16 15:27	登録番号	023
チーム名	湖沼、ダム、物質循環チーム		
行動主体	<p>(水資源機構) 未定  (国土交通省) 未定  日本原料株式会社 代表取締役社長 齊藤安弘  ネオジャグラス 代表取締役社長 堀  リバーフロント研究所(財団法人リバーフロント整備センター) 世話役 審議役 小川鶴蔵  事務局 ジェイマックス株式会社 代表取締役 蓼沼彰</p>		
行動内容	<p>河川は、砂利、砂などの鉱物資源や、窒素、りんなどの物質を上流から移送し、流下の過程で変化しつつ、水理的、物理的、地形的条件の支配を受けて、それぞれの物性に応じた場所に堆積されるという、いわばCO2を必要としない降水(位置エネルギー)を用いた巨大な物質の選別、分級(粒度が水流作用で分けられている)システムが運営されていると考えてよい。</p> <p>本チームは、地質、岩質、地形、河相を分析し、河川を流下し堆積した物質が、どの場所に、どのような有効な物質が、どのように分布し堆積するのか、どのように取り出せばよいのかを見出し、事業化を図るものである。また、社会がどのような河川の堆積物を必要としているかを調査する。その手順は</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1、取り出すべき、有用資源を発見する。 現在課題としている項目は  ヘドロと窒素、りんなどを焼却しないで、資源化する技術を開発する  特定の粒度と物性の中から、国際的な貴重材料である研磨材を発見する</li> <li>2、堆積が社会に悪影響を与えている場所に着目する。 堆積が顕著なダム湖、湖沼、低地のヘドロなど</li> <li>3、水理土砂解析結果から、その物質の物性と3次元の堆積分布状況を理解し、事業化に結びつける</li> <li>4、山地から流出する土砂が、ダムなどで物理的に留まることなく、沿岸域まで到達することの有効性を解明し、ダムの排砂機能の改善に寄与する</li> </ol> <p>また、河川とその流域は、水および物質が、土壌、砂礫などを通過させる広大な微生物分解フィールドであるが、近年の開発によって自然の分解能が著しく阻害され、湧水の減少も顕著になっている。そこで流域がもともと有していた水循環機能を、効率よく回復させる技術を一般化する。</p> <p>このため、生物分解サービスが適正に促進されるための基礎的研究として、分解メカニズムの解明と、水循環系の通水現象を理解して、水循環機能の回復を図る手立てを明らかにする研究を、微生物研究者、水理研究者、河川管理者、自治体と共同研究する</p>		
課題分析	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 研究対象フィールドが河川管理施設や、発電施設内にあるため、立ち入りが困難であり、またダム堆積物は国有財産法に縛られているので、まずは管理者との共同研究を可能にする公的後押しが必要</li> <li>2 これまで厄介者として認識されていた堆積物やヘドロが実は宝の山であるが、まったく新しい取り組みであるので、土砂移動解析研究(研究)、資源として有効活用する者(需要)と有用物としての取り出し技術(技術開発)、流通ルートなど一連の生産、販売ルートの確立が必要。これが産業として成立するためには、堆積物を採取して、搬出し、販売を可能にするガイドラインの制定を国(国土交通省、農水省、通産省)にお願いしたい</li> </ol>		
留意事項			